林 芙美子
狐物語

登場人物

六兵衛

赤兵衛

爺さん

子供たち

人間たち

一場

◆四国の里山。子狐・六兵衛が人間の子供を見かける。
◆ナレーター、六兵衛、子供たち

四国のある山の中に、おもしろい狐がすんでいました。

いつも、ひとりで歩くことがすきでしたが、ある雨の日、いつものように餌をあさって ぽつぽつ歩いていますと、男の子が四五人、がやがや話しながら 山を下っていました。

狐は、時々人間をみたことがあったし、人間は二本の足で立って歩いているので、狐は 珍らしくて仕方がないのです。狐のおかあさんは、「人間のところへ行くとひどいめにあうから、人間のところへ ぜったいに近づいてはいけませんよ。」と、いつもいうのですけれど、狐は、人間の 姿がおかしくて仕方がなかったし、第一、ひょろひょろと、立って歩いているのがおかしくてしかたがないのです。狐は 子供たちのうしろからそっとついて行きました。

子供1 「このへんは 六兵衛狐の出るところだぞ。」

一人の子供が いいました。

子供2 「昼間から出ることは ないだろう。」

また一人の子供が いいました。

子供3 「昼間でも雨が降っているから 出るかもしれん。」

また、もう一人の子供が いいました。

時々、とおくで 雷が 鳴っています。

子供たちは、何となく気味が わるくなったのでしょう、歩いていた子供たちは、ふっと足をとめて 耳をそばたてました。

すると、一人の子供が ふいに後をふりかえって、狐をみました。

子供1 「あッ、狐が出おったぞッ。」

子供たちは びっくりして、まるで豆がはぜたような すさまじい勢で、走って山を下りはじめました。

狐もびっくりしました。どうしてあんなに子供達が さっと走って行ったのだろうと思いました。雨の降るなかを、狐もぬれながら、子供たちの後を 追いかけてゆきました。

二場

◆里に降りたところで、牛の赤兵衛に会う。
◆ナレーター、六兵衛、赤兵衛、爺さん、人間たち

細い山道を　いくまがりもして、やっと、人間の通るらしい道の近くへ来ますと、山の田圃ぞいのところで、大きい牛がもうもうと　ないていました。

狐は　自分たちよりも大きい動物をみて、しばらくあきれて眺めていました。何て大きいのだろう……。お尻は箱のように四角くて、骨ばっていたし、たれさがった腹や脚が　泥だらけです。そしておもしろいことには、大きい鼻の穴に　まあるいかんをつけて太い紐が　ついていました。

狐は　おずおず牛の前へ行って、ていねいに頭をさげました。牛は　びっくりして狐をみました。

六兵衛　「あなたはいったい、どなたさまですか。」

と、狐がききました。

牛は　正直者でしたから、わたしは、桑助さんの家の牛で、赤兵衛というものだとこたえました。狐は　王様のようだと感心しました。

六兵衛　「そうですか、わたしは山の中から来た　六兵衛という狐ですが、このさきへは行かれますか。」

と、たずねてみました。

赤兵衛　「ええ行かれますとも、道はどこまでもつづいていて、にぎやかな河口までつづいていますよ。」

と、教えてくれました。

狐は　ていねいにあいさつをして、雨の中を歩きました。

しばらく行くと、小さい村が ありました。村のとっつきの家では、鶏が 三びきほど遊んでいました。狐は 何も彼も珍らしくて仕方がありません。これは 何というものだろうと思いました。それで、また、ていねいに頭をさげますと、三びきのあわてものの鶏は けたたましくなきたてて 鶏小舎の屋根へ 飛び上ってゆきました。

すると、家のなかから、おそろしく脊の高いおじいさんが棒を持って出て来ました。

爺さん「これッ、狐の奴め、お前、うちのとりを食うつもりだなッ。」

狐は びっくりしました。鶏なんか一度も食べた事がないのに、この人間は 妙な事をいうと思ってぼんやりしていますと、こおンと固い音をたてて 狐は額をいやというほど なぐられてしまいました。思わず尻餅をついているところを、狐は とうとう人間につかまってしまって、木箱の中へ いれられてしまいました。

その晩、人間たちは こんなことを話しあっていました。

人間1「六兵衛狐というのは ひどい奴で、五作さんの家からかえる時、おれは おこわめしを みやげにもらっていたンだが、祖谷を下る途中、とうとう六兵衛に化かされて、おこわめしをぬすまれて、ひでえめにあったよ。」

人間2「おれも、この六兵衛には 痛いめにおうたぞ、妙正寺の番僧に化けて、おれから財布をとりあげて、あげくのはてに、河の中へつつきおとされてしまったものな……。」

六兵衛狐は、箱の中で、こんな話をきいていてびっくりしました。人間というものは何という嘘つきなのだろうと思いました。

六兵衛狐は、いままでにまだ一度も里へ降りたことはなかったし、第一、人間のようなかしこい動物を、化したりなぞしたことは一度もなかったのです。

人間は　おかしなことをいうものだと思いました。昼間、頭をなぐられたところに、大きなこぶが出来て、それが痛くて仕方がありません。山の中へ早くかえりたいと思いました。こんな嘘つきのところにいると何をされるかしれないので、狐はだんだん　こわくなってしまいました。

人間3　「おれのところでは、鶏をもう二度も六兵衛に食われっちまったンだからな……。」

人間4　「狐ぐらい動物のうちで悪い奴はないのう。あれは魔物だからなア。雨の降る晩は、かならず山に灯をつけてからかうし、ろくな事をせんぞ。二三日、六兵衛はひぼしにして、腹をきれいに干して、いっぺん狐汁でもして　みんなで食おうじゃないか。」

人間5　「うん、狸汁は　うめえそうだが、おれは、狐汁というのは始めてだ……。」

狐は　びっくりしました。急にお母さんが　なつかしくなり、涙をいっぱいためて息をころしていました。

夜が更けてから、狐は　一生懸命に箱の蓋をもちあげてみました。石でものっかっているとみえて、蓋を持ちあげるたび、ごろっごろっと石が少しずつ動いている様子です。狐は　根気よく

蓋を持ちあげて、とうとう長いことかかって　扇子がたに、箱の蓋をずらすことが出来ました。そっと首を出しますと、あたりは　うすぐらいのです。かすかに障子の破れから　月の光がさしている様子なので、狐は　やっとの思いで土間へ　はい出す事が出来ました。

人間は　とてもおそろしい動物だとお母さんがいっていたけれど、本当だと思いました。だから、自分達の仲間は　昼間は穴の中にひっこんでいて、人間にみつからないようにしているのだなと思いました。

狐は　土間へ出て、縁の下からそとへ出ることが出来ました。まんまるいお月様が　高くのぼって、山の方で　なつかしい　梟の啼く声がしています。

祖谷の山々が、こんもりとしていて、六兵衛よ、お母さんがとても心配しているから、早くかえっておいで　といっているようにみえました。狐は　急におなかがへってきましたし、頭のこぶは、しいたけみたいに大きくもりあがっていて　とても熱をもっていました。

よろよろと歩いていますと、ある家のところで、もう、もう、もう、と、牛が啼いていました。

六兵衛　「ああ、桑助さんの家の赤兵衛さんだな。」

と、狐が牛小舎の前へ来て

六兵衛　「こんばんわ。」

と声をかけました。

すると、眠れないでいたとみえて、赤兵衛は口をもぐりもぐりうごかしながら、

赤兵衛「ああ、こんばんわ。どうしました。河口まで行ってみたのかね。」

と、やさしく牛はたずねるのです。

狐はひどいめにあって、いままで箱の中にいた話をしますと、

赤兵衛「それは気の毒でしたね。人間というものは何とも勝手なもので、わしらのようなものまで、尻をひっぱたくのだからいやになるのさ。わしだって、たまには、からだのだるい時もあるのだが、何にしても、一日も無駄には やすませてくれないでねえ……無理な仕事をする時、わしは時々、泣くこともあるのさ。いくらこんな生れあわせだといっても、これも神さまのおぼしめしで、こんなものに生れてきているのだもの、一つだってわしは 悪いこともしたことはないのに、尻をぴしりッぴしりッとむちでなぐられる時は、つくづく泣きたくなってしまうよ。生れあわせで仕方がないけど、お前さんのように身軽るに 山の中で自由に住める身が うらやましいさ……。」

と、いいます。狐も何だか牛がかわいそうで仕方がありませんでした。

六兵衛「ほんとに赤兵衛さん、そうですね。わたしたちだって、人間だって、そうながくは生きられないのだから、嘘なんかいわないで、たいらに世の中をくらしたら、それが一番いいですね。あなたは、さっきから口をもぐもぐしていますが、何をたべているンですか。」

赤兵衛　「別に何もたべては　いないのですよ。夕方たべた　わらをいま食べなおして、胃からもどしているンです。」

六兵衛　「今夜はいい月夜ですね。」

赤兵衛　「ああ、わたしは夜が一番楽しみです。人間がねてしまうと、もうわたしは　ひとりで何を考えてもいいのですからね。尻をひっぱたく人もないし、一番楽々とします。」

狐は　ほろりとしました。こんなに王様のようなからだをしていても、自分たちより　つらいことがたくさんあるのだなと同情しました。

六兵衛　「わたしは、このまま山へかえってしまえば、もう二度と里へは　おりて来ませんけれど、元気でいて下さい。そのかわり、夜の夜中に、山の上で、わたしは時々うたをうたってあげましょう。ああ　あの時の六兵衛狐は元気だと思って下さい。――ほら、かすかに梟がないているでしょう。あの木のそばに　わたしの巣があるのです。きっときいて下さい……。」

六兵衛狐は、気のいい正直者の牛と別れて、淋しい山道を祖谷の山の中へいそいそと登ってゆきました。

六兵衛　「ああ助かってよかった。何といっても自分の天地が一番いい。おかあさんは　どんなに喜んでくれるだろう。」

六兵衛は　腹のへったのも忘れて、まるで飛ぶようにしてお山へかえりました。昼間の雨は　からりと晴れて、まるで昼のように明るいお月様が山や森を照しています。

それから毎晩、狐は　里に近い岩鼻の上に出て、赤兵衛に

きこえるように、

六兵衛「こおーん、こんこん、こおーん、こんこん。」

となきました。晴れた夜は、村じゅうに、六兵衛のなく声がよくひびいてきこえたそうです。

〈完〉

Podcast ののラジオ　好評配信中！

視聴・購読はこちらから
https://gekidannono.com

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。
みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。
いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学　林芙美子　『狐物語』Podcast 版

発行日　令和 2 年 12 月 19 日
著　者　林芙美子
編　集　劇団のの
発　行　劇団のの
https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。
　ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。
底　本　『童話集　狐物語』國立書院
初　出　1947（昭和 22）年
図書カード URL
https://www.aozora.gr.jp/cards/000291/card24373.html